

八重山諸島



鳩間島



小浜島

竹富町



新城島



- 石垣島四ヶ村のプーリィ(p174-177)
- 石垣四箇村登野城の旗頭本(p178-179)
- 石垣四箇村大川の旗頭本(p180-181)
- 石垣四箇村石垣の旗頭本(p182-183)
- 石垣四箇村新川の旗頭本(p184-185)



石垣市

石垣島

南ぬ島
石垣空港

嘉弥真島

竹富島

- 沖縄の綱引き(p204-207)
- 沖縄各地

- 竹富島の種子取(p186-189)
- 竹富島の生活用具(p190-191)

凡例

- 国指定 重要無形民俗文化財
- 国選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
- 国登録 有形民俗文化財
- 県指定 有形民俗文化財

道路凡例

- 331 国道
- 82 県道主要地方道
- 17 県道一般道



黒島

● 選択年月日 / 1993(平成5)年11月26日 ■ 保護団体 / 石垣島登野城字会・大川字会・石垣字会・新川字会

● 所在地

石垣市宇登野城、大川、石垣、新川

● 祭事期日

旧暦6月の2回目の壬及び癸の吉日から2日間

石垣市の中心部の登野城・大川・石垣・新川の4つの集落は四ヶ村と呼ばれ、古くから合同のプーリィ（プールともいう。豊年祭）が行われてきました。プーリィの初日は、各ムラ（字会）のオン（御嶽）で、ツカサなどの神女を中心に行事が執り行われることから「オンプーリィ（オンプール）」と呼ばれます。2日目は、4つのムラをあげて豊穰を祝い、来年の豊作を祈願することから「ムラプーリィ（ムラプール）」と呼ばれます。午後から、各ムラごとに象徴する旗頭を押し立て、新川の「真乙姥御嶽」

に集まり、様々な芸能を奉納します。また、オンの前では、サイレーという男の神がツカサに五穀の種子を授ける儀式や、選ばれた1人の女性がツカサから貫棒をもらい、雄綱と雌綱をつなぐアヒャー綱（女性だけの綱引き）などの模擬的な儀礼も行われます。夕方には松明が灯され、東西2組に分かれて大綱引きが行われます。

石垣島四ヶ村のプーリィは、沖縄各地で古くから行われてきた麦や稲の4つの祭り（2・3月の麦祭りと5・6月の稲祭り）の最後に行われるものです。この行事は、オンと村のつながりが現在も生きており、また、豊年行事の古い形が残っていることや、そこで繰り広げられる様々な芸能などから沖縄を代表する行事の一つといえます。

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

オンプーリィ(オンプール)



登野城



石垣



大川



新川

ムラブーリィ(ムラブール)



真乙姥御嶽でのミシャグパーシイ
(神歌を歌い、神酒を注いでツカサに献上する)



旗頭の奉納



長崎御嶽でのスナイ(巻踊り)の奉納

用語の解説



ツカサ

宮古・八重山諸島で村落祭祀を執り行う最高位の女性神人のこと。基本的にツカサは村落に1名だが、村落内の複数の御嶽ごとに祭祀を担当するツカサがいることもある。

アヒャー綱

綱引きの前に、真乙姥御嶽の前で全ての婦人たちが参加し、綱を形式的に引く儀礼。実際に綱を引くことはしない。新川の宇根通事の妻と婦人が、夫が無事に帰ってくることを願って二人で綱を引き合ったのが起源と伝えられる。



ムラブーリィ(ムラブール)



奉納舞踊



五穀の種子授けの儀礼

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財



アヒャー綱 (女性だけの模擬的な綱引き)



武者の闘い



大綱引き

いしがきし かむらとのしろ はたがしらぼん
石垣四箇村登野城の旗頭本

県指定

●指定年月日 / 2007(平成19)年6月19日 ■所有者 / 登野城字会

●所在地

石垣市立八重山博物館

登野城の旗頭本は、『明治廿弍年己丑旧十月十八日寫旗頭絵本』と『旗頭本登野城村』の合冊となっています。旗頭本を収める箱には「旗頭絵本」、本の表紙に「旗頭絵本字登野城」と記されています。製作年代は明らかではありませんが、1981(昭和56)年9月に記された「覚」によると、『旗頭絵本』は、八重山蔵元最後の絵師である宮良安宣が、それ以前の古絵図から写したものであると伝えられています。

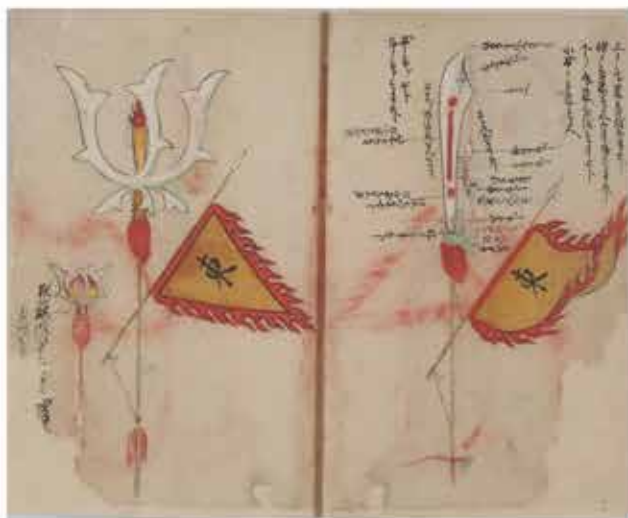
『旗頭絵本』は、ほとんどの絵図に色付けがされています。これらの絵図には、明治期のプーリィ(プールともいう。豊年祭)や天長節(天皇の誕生日を祝った祝日)における記録と同時に、新川、石垣、大川、

平得、真栄里、大浜、宮良、白保の旗頭の記録なども記されています。

『旗頭本登野城村』には、中国年号の乾隆(1736～1795)、嘉慶(1796～1820)、道光(1821～1850)年間において、登野城村が、石垣、大川、新川村の綱引きに加勢したとの記録や、猪狩りの時に立てたヤマカシラ(山頭)の絵図もあります。

四箇村では、現在でも旗頭本をもとに、各字のシンボルである旗頭が作られています。2019(令和元)年のプーリィでは、字登野城は「オオゴチョウ」と「雉牡丹」の旗頭を奉納しました。登野城の旗頭本は、旗頭製作の歴史的な移り変わりや時代的・地域的な特色を示すものとして重要です。





2019(令和元)年の旗頭



オオゴチョウ



雉牡丹

用語の解説

蔵元

離島に置かれた首里王府の出先機関(役所)。

プーリィ

P174～177[石垣島四ヶ村のプーリィ]を参照。

いしがきし かむらおおかわ はたがしらぼん
石垣四箇村大川の旗頭本

県指定

●指定年月日 / 2007(平成19)年6月19日 ■所有者 / 大川字会

●所在地

石垣市立八重山博物館

大川の旗頭本は、『旗頭本大川村用紙式拾枚』『旗頭本大川村用紙拾五枚』『旗頭本大(以下欠)』の3冊から構成されています。旗頭本に描かれた旗頭は、19世紀から20世紀初めまでに製作されたもので、作者は明らかではありません。

『旗頭本大川村用紙式拾枚』には、色付けされた絵図や記録24枚が収められています。旗頭のデザインとして、「ニープヤライ」「八折ノ垣」「ウツヌ(撫子)」「水車」「ミヨウラ」「四ツ波」「ウチワ」「下り鯉」などが描かれ、寸法・旗文字なども記されています。

『旗頭本大川村用紙拾五枚』には、朱及び墨書の絵図や記録が16枚収められています。絵図が中心ですが、記録や旗頭の番号・寸法なども記されています。

『旗頭本大(以下欠)』には、朱や墨書による絵図や記録21枚が収められています。中国年号の嘉慶(1796～1820)、道光(1821～1850)咸豊(1851～1861)年代の記録、旗頭製作年代、「ハンナ(玻武名)」や「ホンナ(保武名)」と記され



た旗文字や、村を東西に分けて立てたと思われる旗頭の名称と番号や寸法が記されています。また、登野城村と大川村の間で頭問答(旗頭のデザインについての争い)の記述が見られます。

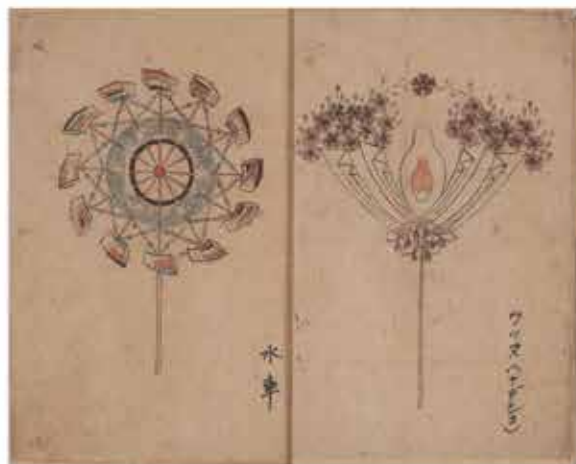
四箇村では、現在でも旗頭本をもとに、各字のシンボルである旗頭が作られています。2019(令和元)年のプーリィ(プールともいう。豊年祭)では、字大川は「松竹梅」と「ズルカキ(さがりばな)」を奉納しました。大川の旗頭本は、旗頭製作の歴史的な移り変わりや時代的・地域的な特色を示すものとして重要です。



八折の垣



ニーブヤライ



水車(左)、ウツヌ(ナデシコ)(右)



ミヨウラ



ウチワ(左)、四つ波(右)



ズルカキ(左)、下り鯉(右)



2019(令和元)年の旗頭



松竹梅



ズルカキ(さがりばな)

用語の解説



プーリイ

P174～177「石垣島四ヶ村のプーリイ」を参照。

いしがき し がむらいしがき はたがしらぼん
石垣四箇村石垣の旗頭本

県指定

●指定年月日／2007(平成19)年6月19日 ■所有者／石垣字会

●所在地

石垣市立八重山博物館

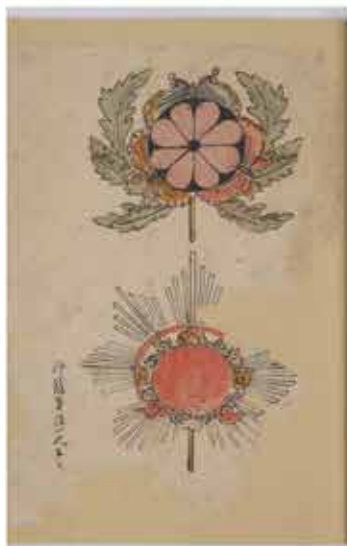
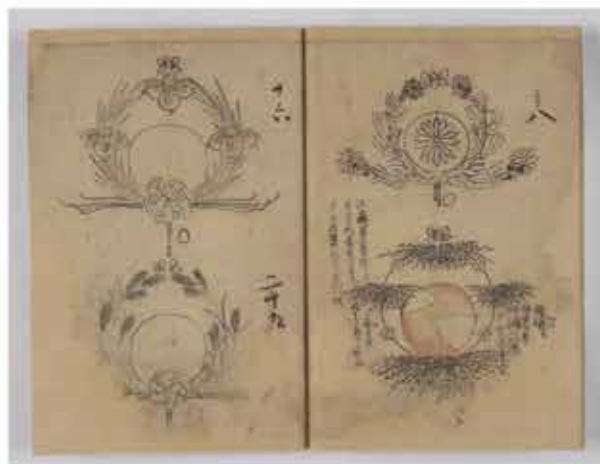
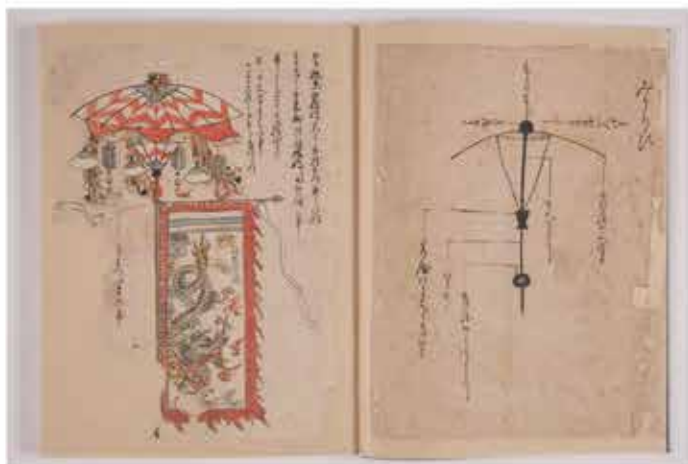
石垣の旗頭本「石垣邑旗頭記」は、琉球国時代末期から明治期にかけて制作されたと考えられています。作者は明らかではありませんが、表紙には「道光二十二年壬寅六月吉日石垣邑旗頭記」と記されています。中国年号の道光22年は、西暦の1822年にあたります。

この旗頭本には、24枚の絵図や記録が収められています。そのうち18枚は色付けされていて、「みようら」「光」「雪の丸」などの旗頭名や旗文字、寸法が記されています。また、旗頭本の傷みがひどいため、識名仁屋信守が1842(道光22)年に旗頭本

を寄進したことを示す文書が添付されています。さらに、宮良村が製作した旗頭「日の光」が、石垣村のものに似通っており、石垣村から抗議を受けて取り消したという文書も綴られ、中国年号の道光(1821～1850)、光緒(1875～1908)年間や明治期(1868～1912)の綱引きの記録も散見されます。

四箇村では、現在でも旗頭本をもとに、各字のシンボルである旗頭が作られています。2019(令和元)年のプーリイ(プーるともいう。豊年祭)では、字石垣は「光」と「松竹梅」の旗頭を奉納しました。石垣の旗頭本は、旗頭製作の歴史的な移り変わりや時代的・地域的な特色を示すものとして重要です。





光(下)が描かれている。



旗頭を運んでいる様子。旗頭の飾りの大きさがわかる。



2019(令和元)年の旗頭



光



松竹梅

用語の解説

仁屋

首里王府の位階制度(官僚や役人の序列や位の制度)。新参士族や上級平民(村役人など)の子弟で、無位の者を仁屋と称した。

プーリィ

P174～177「石垣島四ヶ村のプーリィ」を参照。

いしがきし かむらあらかわ はたがしらぼん 石垣四箇村新川の旗頭本

県指定

●指定年月日／2007(平成19)年6月19日 ■所有者／新川字会

●所在地

石垣市立八重山博物館

新川の旗頭本は、『旗頭本新川村』『旗頭記新川村』『旗頭図新川村』『旗頭本新川むら』の4冊と、旗頭本から一部抜け落ちたものを綴り直した『旗頭本新川村19枚』から構成されています。

『旗頭本新川村』には、墨書の絵図や記録10枚が収められています。1895(明治28)年の天長節(天皇の誕生日を祝った祝日)や1899(明治32)年のプーリィ(プールともいう。豊年祭)の綱引きに立てられた旗頭の他、麾の地歌(ザイ踊りの時の歌)、

太鼓や鉦鼓の譜などが記されています。

『旗頭記新川村』には、墨書の絵図や記録7枚が収められています。記録の中には、干ばつのため蔵元からの命令で権現堂前の道路で雨願い(雨乞い)の綱引きをしたことや、旗頭製作者に関する記述もあります。

『旗頭図新川村』には、墨書の絵図及び記録8枚が収められ、中国年号の道光(1821～1850)年間の記録もあります。また、『旗頭本新川むら』には、墨書の絵図及び記録25枚が収められ、中国年号の嘉慶(1796～1820)年間の記録や「梅公氏新城與人」「長栄氏仲里にや」らが製作したという記録が残されています。

『旗頭本新川村19枚』には、色付け絵図や墨書の絵図などが収められています。旗頭のデザイン、製作年代、寸法、旗文字が記され、中には製作者名、製作理由、設置場所などの記録もあります。

四箇村では、現在でも旗頭本をもとに、各字のシンボルである旗頭が作られています。2019(令和元)年のプーリィでは、字



あらから 新川は「田」と「矢」の旗頭を奉納しました。あら 新川の旗頭本は、旗頭製作の歴史的な移り変わりや時代的・地域的な特色を示すものとして重要です。



天長節の記録



道光年間の記録



(旗頭本新川むら)梅公氏新城與人の製作記録あり

2019(令和元)年の旗頭



田



矢



ザイ踊り

ザイは、竹の棒に赤白黄の紙を結びつけたもので、稲穂が実り垂れ下がる様子を表す。四ヶ村のプーリイで踊られる。

用語の解説



鉦鼓

金属製の打楽器の一種。沖縄の祭事では縄やひもを通して下げ、手で持ち木製の棒で打ちならす。大小のサイズがあり、小型の鉦(かね)を方言で「カニ」とも呼ぶ。綱引きなどで太鼓と一緒に用いられるチンク(金鼓)も鉦鼓のひとつである。

蔵元

用語集 P225参照

プーリイ

P174～177「石垣島四ヶ村のプーリイ」を参照。

たけとみじま たんどうる
竹富島の種子取

国指定

●指定年月日 / 1977(昭和52)年5月17日 ■保護団体 / 竹富島民俗芸能保存会

●所在地

竹富町字竹富

●祭事期日

毎年旧暦9月か10月の甲申から10日間

●その他

1974(昭和49)年12月4日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として国に選択

沖縄では、稲や粟の種まきの行事を種子取りといいます。以前は各地にありましたが、現在までその形をよく残しているのは、竹富島でタンドルとか、タナドゥイと呼ばれている種子取りの行事です。

7日目と8日目には、早朝から世持御嶽で神役のツカサ(司)が祈願を行い、仮設舞台でも豊年と健康を祈願する儀式が行われます。その後、午前10時頃から世持御嶽の前で様々な芸能が演じられます。両日とも世持御嶽の前では「庭の芸能」が、仮

設舞台では「舞台の芸能」が行われます。舞台の芸能では、7日目に字玻璃座間、8日目に字仲筋の芸能が披露されます。また、7日目の夜には「世乞い」といって、各集落の人々が家々を回って巻踊りが行われます。

御嶽の前で演じられる「庭の芸能」では、棒踊・太鼓・ジッチュ・マミドー・馬ヌシャーなどの集団での踊りが披露されます。ピーヌカン(火の神)の前の仮設舞台で演じられる「舞台の芸能」では、「ホンジャー(大長者)」が祝詞を述べた後、「ミルク(弥勒)」が子孫を連れて登場します。続いて、「鍛冶工」「種蒔」などの狂言、「シングル口」などの踊り、雑踊や組踊も演じられます。

竹富島の種子取は、芸能的にも民俗的にも貴重な内容を含んでいます。

種子取の祈願



ミルク起こし



ツカサ(司)たちによる祈願

庭の芸能



ガーリをする人々



棒踊



マミド



馬ヌシャー



ジッチュ

用語の解説



神役

用語集 P224参照

ツカサ(司)

用語集 P226参照

巻踊り

用語集 P228参照

ミルク(弥勒)

用語集 P228参照

狂言

用語集 P224参照

舞台の芸能



ホンジャー (大長者)



ミルク (弥勒)



世持 (狂言)



鍛冶工 (狂言)



シドゥリャニ (狂言)



鬼捕り (狂言)



しきた盆 (舞踊)



タノリヤー (舞踊)



サングルロ (舞踊)



仲筋ぬヌペー (舞踊)



元タラクジ (舞踊)



組踊「父子忠臣」

世送り



たけとみじま せいかつようぐ 竹富島の生活用具

国登録

●登録年月日 / 2007(平成19)年3月7日 ■所有者 / 喜宝院

●所在地

竹富町字竹富(喜宝院蒐集館)

このコレクションは、八重山地方の竹富島で収集された生活・生産用具をまとめたもので、衣食住、生業、社会生活、信仰儀礼・芸能の大きく4つに分けることができます。

これらの生活用具には、島に自生する植物素材を巧みに利用し、亜熱帯の高温多湿の気候風土で暮らすための工夫が見られます。八重山地方に生きる人々の暮らしぶりをありのままに物語る注目すべき資料です。

*

○衣食住に関する用具には、クバ(ビロウ)の葉で作った笠や蓑、アダンの葉などで作った草履類、クバの幹を使ったコシキ(甑)、クバの葉で作った水くみなど、亜熱帯に生息する植物を素材とする用具類があります。カヤ(茅)を芯にクージ(トウズルモドキ)で編んで巻き上げた容器類も豊富で、穀物などを守る貯蔵用具として重要なものでした。また、糸芭蕉の繊維を織った芭蕉布をクール(紅露蔓)の根で染めたクールバシヤシン(作業着)は通気性が良く、涼しくて丈夫な衣類でした。



稲用のカヤ製甑(かご)



クールバシヤシン



*

○生業に関する用具類は、芋などを作る畑作に用いるピラ(ヘラ類)やイラナ(粟の穂刈り鎌)など農耕用具や、小魚類・タコ漁などで用いる漁具があります。また、貢納品の製作のための地機・高機など、糸づくりから織りまでの関連用具が残されています。



地機(地面や床に座って布を織る織り機のこと)



ウムブイピラ



ピラ(ヘラ)

*

○社会生活に関しては、人頭税の貢納関係の計量具などが特徴的です。ワラザン(藁算)は、パラッタザンやサンともいい、縄の結び目で家の数や貢納物の数量、金額な



ワラザン



秤(はかり)

どを記録・伝達するためのものです。ワラザンは沖縄独自のものであり、その種類が豊富に残され、全国的に見ても貴重なものです。

*

○信仰儀礼・芸能に関する用具類も豊富で、旅の安全を願うカジパタ(風旗)、芸能で使用されたミルク(弥勒)面やアンガマ面、楽器類などがあります。

用語の解説



養

用語集 P228参照

コシキ(藪)

用語集 P225参照

カヤ

用語集 P224参照

クール(紅露蓑)

用語集 P224参照

地機・高機

用語集 P226参照

人頭税

用語集 P227参照

ミルク(弥勒)

用語集 P228参照

アンガマ

用語集 P224参照

西表島の節祭

国指定

●指定年月日 / 1991(平成3)年2月21日 ●保護団体 / 西表民俗芸能保存会

●所在地

竹富町字西表祖納、星立(干立)

●祭事期日

旧暦8、9月前後の己亥の日から3日間

●その他

1978(昭和53)年1月31日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の「西表島祖納・星立の節祭」として国に選択

シチ(節祭)は、八重山諸島などで行われている行事で、季節の折り目、年の折り目を表す祭りです。八重山諸島では、旧暦8・9月に、今年の豊作を感謝し、来年の豊穡と人々の平安を祈願するシチ(節祭)が行われます。西表島に伝承されている節祭のうち、祖納と星立(干立)の節祭が指定を受けています。

初日は「トゥシヌユー(年の晩)」といい、各家庭での行事です。家屋敷の内外を清め、夜に「シチフルマイ」といって、ごちそうを食べます。神女たちは、御嶽に参拝します。

2日目は「世乞い」と称して、舟漕ぎ競漕やミリク(弥勒)の行列、ヤフヌティ(權踊)、パチカイ(早使い)、キョンギン(狂言)、棒踊、獅子舞、アンガー踊りなどの芸能が、にぎやかに繰り広げられます。

3日目は「止留式」と称して、カー(井戸:祖納はウヒラカー、星立(干立)はウイヌカー)の清掃を行い、水恩(飲み水から受ける限りない恵み)への感謝の祭りを行います。このような祭りの流れは、祖納も星立(干立)も同じように行われています。

西表島の節祭は、本土の正月とは異なる時期に行われる、正月と似たような行事の特徴をよく示すものとして高く評価されています。祖納と星立(干立)、その内容に多少の差はあるものの、神事芸能としての特色を十分に備え、芸能の移り変わりの過程を知る上で貴重なものです。



船漕ぎ競漕(海の彼方から五穀豊穡がもたらされる)

ミルク(弥勒)の行列



祖納



星立(干立) (写真提供: 竹富町教育委員会)

祖納の祈願と芸能



マエドマリウガンでの祈願

用語の解説



ミルク(弥勒)

釈迦滅後に弥勒菩薩がこの世に降り人々を救うという仏教信仰が、沖縄に古くからある来訪神信仰と結びついたと考えられる。沖縄本島や八重山各地で、豊年祭や節などに、ミルクと呼ぶ弥勒が来訪神として現れ、豊年をもたらすとされている。

パチカイ

用語集 P228参照

キョンギン(狂言)

用語集 P224参照

民俗



アンガー踊り





ルッポー（馬狂言）



ミリク（弥勒）の座舞い



奉納舞踊（祖納岳節）



ウヒラカーでの水恩感謝の礼願

星立(干立)の祈願と芸能



フタデウガンでの祈願



ヤフヌティ（権踊）



アンガー踊り



カピラハヤチカイ



オホホ (ミリクの行列の人々を誘惑しようとする仮面神。
千立の節祭に登場する。)
(写真提供：竹富町教育委員会)



獅子舞 (写真提供：竹富町教育委員会)



ウイヌカーでの水恩感謝の儀礼

こはまじま そーら しちい たなんどうる げいのう
小浜島の盆、結願祭、種子取祭の芸能

国指定

●指定年月日／2007(平成19)年3月7日 ●保護団体／小浜民俗芸能保存会

●所在地

竹富町字小浜

●祭事期日

ソーラ(盆)：旧暦7月13日～16日

シチイ(結願祭)：旧暦8・9月の己亥の日から4日間

タナンドゥル(種子取祭)：旧暦9・10月の2日間

●その他

1995(平成7)年11月8日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の「小浜島の芸能」として国に選択

小浜島では、ソーラ(盆)とシチイ(結願祭)、タナンドゥル(種子取祭)に独自の芸能が伝承されています。ソーラには、ニムチャーニンツ(念仏人数)が村の全ての家々を訪問し、庭先で芸能を演じます。各家々では、ンゾーニムチャー(無蔵念仏)やシチグッチニムチャー(七月念仏)のニムチャー歌に合わせて、アンガマたちのソーランブンドゥリイ(精霊踊り)が踊られます。

シチイは、今年の豊作に感謝し、来年の五穀豊稔を祈願する祭りで、芸能が最も豊富な行事です。とくに、2日目のショーニチ(正日)には、カフニワン(嘉保根御嶽)のザー(神庭)で、北と南の2つの集落がそれぞれ伝承する芸能を奉納します。出演

者全員によるザーマーリイ(座廻り)に始まり、獅子舞のザーマーリイ、棒踊りと続きます。棒踊りの後、カフニワンの拝所に向かって舞台が設置され、最初に来訪神(北集落はメーラク〔弥勒〕、南集落はフクルクジュ〔福祿寿〕)が登場する演目が演じられます。その後も、2つの集落が交互にキョングイン(狂言)とブンドゥリイ(踊り)を演じ、20以上の演目が上演されます。

タナンドゥル(種子取祭)は、種もみをまき、苗が順調に育つように祈願する行事です。集落内のワン(御嶽)や神役の家、さらには各家々で、苗代にまいた稲の種が順調に育つことを祝う内容のアヨー(歌謡)を男性たちが歌い、稲が豊かに実るよう祝います。

小浜島では、様々な祭りに多彩な歌や踊り、キョングインなどが演じられ、シチイでの「ブーピキ(苧引き)」「小浜節」「ダートゥーダー」「ハピラ」など、小浜島独自の演目もみられます。

小浜島の行事で演じられる芸能は、芸能の移り変わりの過程や他地域には見られない地域的特色を示す重要なものです。

ソーラ(盆)の芸能



家々を廻り、芸能を演じるニムチャーニンツ

アンガマたちのソーランブンドゥリイ(精霊踊り)
(写真提供：竹富町教育委員会)

シチィ(結願祭)の祈願と芸能



カフニワン(嘉保根御嶽)での祈願



メーラク(弥勒)のザーマーリィ(座廻り)



フクルクジュ(福祿寿)のザーマーリィ(座廻り)



シュンギン(初番狂言)
(写真提供: 竹富町教育委員会)



小浜節



フービキ

用語の解説



ニムチャーニンツ(念仏人数)

盆の芸能を演じる集団。

神役

用語集 P224参照

アンガマ

用語集 P224参照

苗代

稲の種をまいて苗を育てる所。

拝所

用語集 P228参照

ダートウダー

用語集 P226参照

キョングイン(狂言)

用語集 P224参照



サクホーキョングン(作方狂言)



ハピラ



ダートウダー

タナドゥル(種子取祭)の祈願と芸能



高保根御嶽でのミシャグカンザリ



メーラクヤー(弥勒の面を保管する家)での農事懇談会。
メーラク(弥勒)の仮面を祀り、豊穰を祝う儀礼を行い、アヨーなどを歌う。フククジュヤー(福祿寿の面を保管する家)も同じように行う。

民具でみる私たちの暮らし

人はどのような特徴をもつ生き物でしょうか。それは直立二足歩行することや言葉を話すこと、火や道具を使うことでしょうか。いま地球上にいる動物のなかで、もっとも人間に近い動物がチンパンジーです。道具に注目すると、チンパンジーも人も道具を扱いますが、とくに人は暮らしに必要としている細かい道具から大きな道具まで作りあげる技術をもっています。人はチンパンジーと違って、言葉や文字などの手段によって仲間から情報を手に入れ、石や木材などをひろい集めていろいろな道具をつくれるわけです。そう、みなさんがよく親しんでいる『あつまれ どうぶつの森』（任天堂、2020年）のように。

さて、私たちはどうして道具を文化財として扱うのでしょうか。対象となる道具を観察することで、何がわかるのでしょうか。

道具は私たちの命をつなぐ食事や住まいが大きく関係しています。作物を育てやす

くするために土地を耕す鋤や鋤があったり、収穫するために鎌があったり、収穫したものを運びやすくするために籠や袋があったり、保存しやすくするために甕や壺があったり、と様々な用途によって私たちは道具をつくってきました。

空腹をみたすのは料理、そして、その食材こそが獲物と作物でした。人はいかに的確で不自由なく食材を手に入れるか。その工夫を重ねるなかで生きるために必要だったのが技術と道具でした。

つまり、暮らしのなかの道具を観察することは対象となる獲物や作物がどの場所に生息しているか、そして、生息する環境がどのような自然に成り立っているか、それらの空間と世代を越えて伝えられてきた人々の暮らしぶりがみえてきます。

そのような地域の民衆が生み出してきた道具を私たちは民具として扱っているわけです。



ウデナガカクレダコ
(方言名：ソヌジグラー、ソナザグラー)
(写真撮影：越来勇喜2020年撮影)



マダライモガイなどで作ったソヌジベントウの漁具を仲原正和さんが海面へ投げるようす。腰には竹製品のティール（かご）をガムテープで補強したものをとりつけている。

(写真撮影：越来勇喜2020年撮影)

はてるまじま
波照間島のムシャーマ

国選択

●選択年月日／1993(平成5)年11月26日 ■保護団体／波照間民俗芸能保存会

●所在地
竹富町字波照間●祭事期日
旧暦7月7日～16日のソーラン(精霊際)の中の日(旧暦7月14日)に行われる。

ムシャーマとは、波照間島で行われるソーラン(旧盆)に島を上げて多種多様な民俗芸能を演じる行事です。島を東、前、西の3組に分けて、合同で行われます。

行事当日の朝、各組ごとに所定の場所に集まった人々は行列を組み、会場である波照間公民館へ向かいます。行列は、先頭に大旗の旗持ち、次に五穀豊穡を意味するミルクヌナーリ(弥勒の実)と呼ばれる飾り物を持つ者、ミルク(弥勒)、ミルクに従う子どもたち、ミルク節の歌い手と三線が続きます。その後ろに、各組ごとに準備された10ほどの芸能が、歌い踊られながら

続きます。行列の最後は、棒や刀を手に武術的な演技を行う者とテーク(太鼓)、2頭の獅子で構成されます。

行列が公民館に到着すると、各組のテーク(太鼓)や棒が披露され、続いてニンブチャー(念仏踊)が演じられます。午後からは、公民館の中庭に設置された舞台上、組ごとに舞踊や芝居を上演し、最後は各組の獅子舞が演じられます。舞台での上演が終わると、朝と同様に行列を組み、演技をしながら各地区へと戻ります。

これら一連の芸能には、沖縄各地の豊年祭に通じる要素も多くありますが、ムシャーマは念仏踊を含み、行事全体が旧盆の中に組み込まれているなど、芸能の移り変わりの過程や地域的特色を示す重要な民俗芸能です。



ミルク(弥勒)の行列



行列での芸能



行列での芸能



公民館の庭での棒術



公民館の庭での太鼓踊



公民館の庭でのニンブチャー (念仏踊)



獅子舞

用語の解説



ミルク(弥勒)

釈迦滅後に弥勒菩薩がこの世に降り人々を救うという仏教信仰が、沖縄に古くからある来訪神信仰と結びついたと考えられる。沖縄本島や八重山各地で、豊年祭や節などに、ミルクと呼ぶ弥勒が来訪神として現れ、豊年をもたらすとされている。

よ な ぐ に じ ま さ い じ げ い の う
与那国島の祭事の芸能

国指定

●指定年月日 / 1985(昭和60)年1月12日 ■保護団体 / 与那国民俗芸能保存会・東地区芸能保存会・西地区芸能保存会・島仲地区芸能保存会・比川地区芸能保存会・久部良地区芸能保存会

●所在地
与那国町

●祭事期日

豊年祭：旧暦6月庚又は辛の吉日

スル(盆)：旧暦7月13日～15日

節祭：旧暦8・9月己亥の日

カンブナガ(マチリ)：旧暦10・11月庚申以後25日間

不定期で演じられるドリティ、ダートウダギもある

与那国島は、南方や中国の文化の影響を受けるとともに、琉球国時代の文化も受け入れ、八重山諸島の中でも異なる文化を継承している地域です。島内には12の御嶽があり、季節の節目にはウガンフトゥティ(豊年祭)、スル(盆)、シッティ(節祭)、シティガン(結願祭)、カンブナガ(マチリ)

などの祭事が行われ、様々な歌や踊りが演じられます。

島の祭事のうち、シティガンでは最も多くの芸能が演じられます。棒踊り、舞踊、狂言、組踊、獅子舞、ウブンダ(翁が登場して祝詞を述べる)、ミルク(弥勒)など、様々な歌や踊りが、各集落ごとに披露されます。また、カンブナガでは、神器をとりかざして舞うタマハティ(魂貼の意)も行われます。

与那国島の祭事の芸能は、昔の姿を今に留めたものが多く、芸術的にも、民俗的にもきわめて価値が高いものが数多く伝承されています。

ウガンフトゥティ(豊年祭)の芸能



ミティ唄



猫小節

用語の解説

シッティ(節祭)

用語集 P225参照

狂言

用語集 P224参照

シティガン(結願祭)

用語集 P225参照

カンブナガ(マチリ)

旧暦10月以降の庚申の日から25日間行われる、与那国島の存続と繁栄を祈願する重要な祭祀。クブラマチリでは、異国人・大国人退散、ウラマチリでは牛馬繁殖、ンディマチリでは子孫繁栄・嫁取り・婿取り、ンマナガマチリでは五穀豊穡、ンダンマチリでは航海安全の祈願が行われる。また、マチリの期間は、四つ足の動物、特に牛の屠殺や牛肉を食べることを禁じている。

スルブディ(旧盆に演じられる芸能)



(写真提供：与那国町教育委員会)



カンブナガ(マチリ)の芸能



ドゥンタとよばれる巻踊り(クブラマチリ)

(写真提供：与那国町教育委員会)



アサカダイキングイ

(アドリブを交えて与那国方言で行う狂言：ンディマチリ)
(写真提供：与那国町教育委員会)



ながく節(ンマナガマチリ)
(写真提供：与那国町教育委員会)



旅果報節(ンダンマチリ)



タマハティ(旧家の女性が家に伝わる
槍や弓、玉、刀などを手に唄い舞う)

おきなわ つなひ 沖縄の綱引き

国選択

●選択年月日 / 1994(平成6)年12月7日

●祭事期日

旧暦6～8月を中心に行われる

沖縄の綱引きは、ほとんどが集落単位で行われ、現在も多くの地域に残っています。綱引きが行われる時期は、かつて稲の収穫期と収穫祭の時期であった旧暦6月～8月に集中していますが、なかには旧正月に行われるところもあります。綱引きが最も集中するのは、6月15日前後の「ウマチー綱」(稲粟の収穫祭)、6月25日前後の「年浴綱」(苗代始め、雨の祈願祭)、7月の「盆綱」、8月10～15日前後の「十五夜綱」です。また、干ばつ時には「雨乞い綱」が行われることもあります。

毎年1回綱引きを行っている地域も多ありますが、中には7年または12年に1回の周期で行う地域や、1年に2回以上行う地域もあります。綱引きの目的には、豊作の感謝と祈願、年占い(来年を占う)、雨乞い、子孫繁栄、厄払い、娯楽などがあります。

綱引きは、地域で行われる年中行事の中でも最大の行事で、村を2つに分けているような分野で競争し合うため、村中がにぎわいます。また、材料集めは少年たち、綱打ちは青年たち、御嶽への祈願は神女や村の役人が行うなど、年齢集団による仕事の分担も行われます。

沖縄の綱引きには、一本綱はほとんどみられず、多くが雄綱と雌綱をカヌチ棒(貫棒)で結んで引き合います。綱の形態や引き方については、南九州や朝鮮半島との関連性も指摘されています。

沖縄の綱引きは、年占いや邪気祓いの要素を持つ一方で、芸能を伴ったり、綱の一部を焼いたり、川や海に流したりするなど古い習俗をよく残しており、極めて豊富な内容となっています。

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

用語の解説

カヌチ棒(貫棒)

雄綱と雌綱を結合した後に差し入れる止め木のこと。





国頭村字奥間



宜野湾市大山



西原町字我謝





南風原町字津嘉山



南風原町字照屋



南風原町字喜屋武



糸満市真栄里





宮古島市上野宇宮国



石垣四ヶ村のプーリィ



民俗

